

長者塚古墳

長者塚古墳は、赤城山南東麓、標高約350mの東傾斜する地形上に存在する。
墳丘の高さは約2 m、直径約20 m。近年の調査で五角形墳で有る事が確認された。

現状は、墳丘頂上部の封土は取り除かれ、玄室の天井石も1石が残るのみで失われている。埴輪は確認されておらず、副葬品等についても認められない。



長者塚古墳北面



西面

長者塚古墳



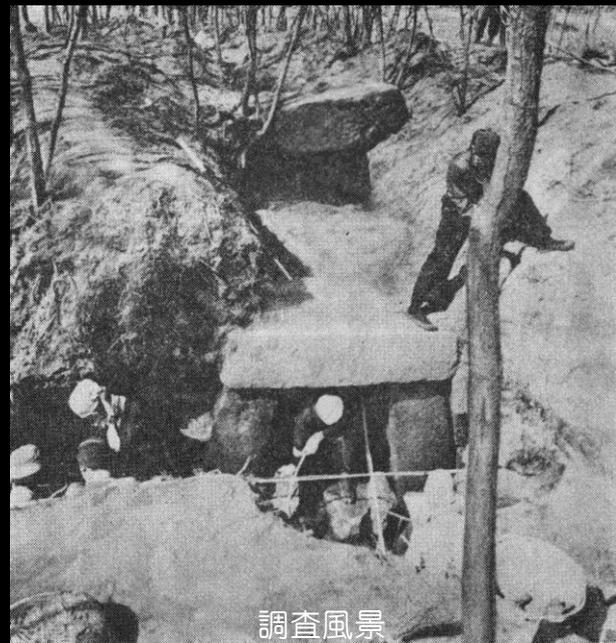
南面 入口



玄室

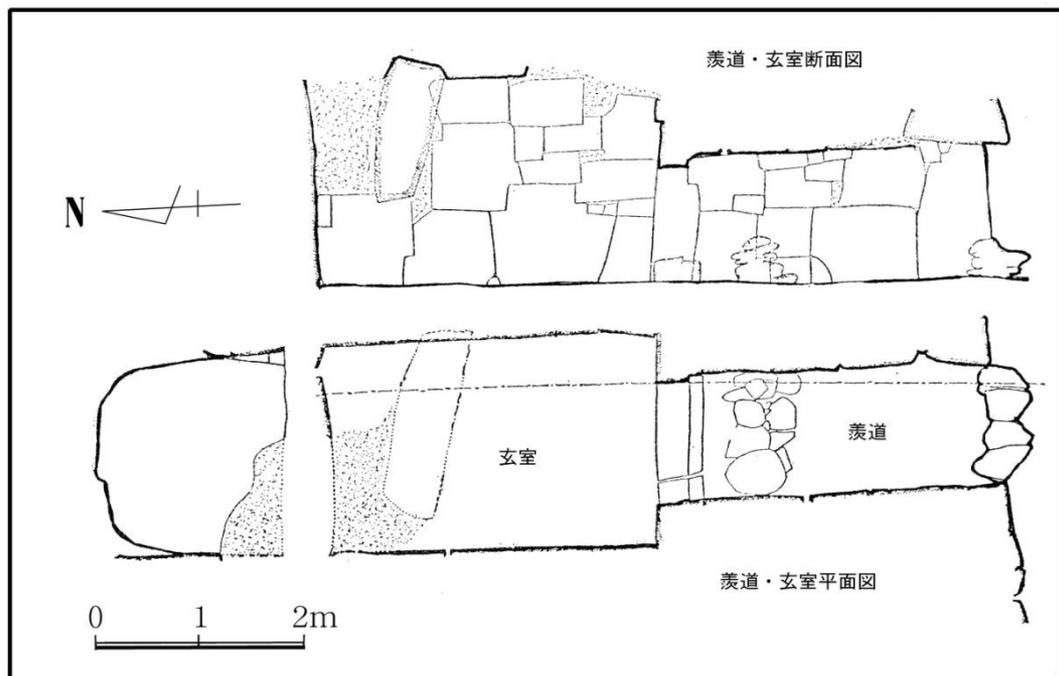
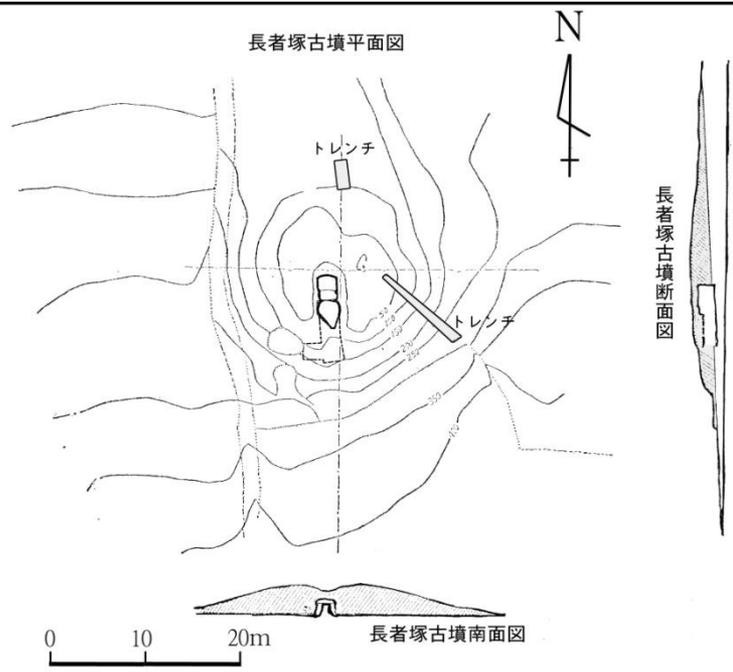
長者塚古墳

昭和33年群馬大学による長者塚古墳の調査がおこなわれた。
古墳の詳細な計測や実測図面の作成、写真撮影等を実施した。



調査風景

群馬大学による実測図面



歴 史 古 代 編

(4) 長者塚古墳——上毛白墳総覽新里村第四六号——

本古墳は勢多郡新里村大字関字上長者一三三番地にある。赤城山の裾が美しく尾をひく赤城南麓一帯には数多くの古墳が存在するが、本古墳はその赤城山の東南麓にあり、板橋まわり桐生行のバスを関で降りて約二十分、坂を登りつめてやや平になった所にあり、八幡様の裏手にあたる、標高約三百五十米、遠くには富士を眺め、下の部落を一望の下に見おろせる高所であり、近辺には他に古墳らしきものは見当たらない。尚本古墳の南、西側は開拓されて畠となり、東、北側は雑木林であるが、最近までこの附近は林であったらしい。

A 外部構造

本古墳は円墳である。墳丘頂上の封土は既に取り除かれ、玄室の天井石が露出していた。然し他は旧形を保っている様である。立地は既述の如く赤城山東南麓の緩傾斜地にあり、その構造の上からみると、山寄せである。

墳丘の高さは現在南側で見ると二五米〇、北で見ると一米五〇であり、直径は南北一九米、東西二二米である。

墳丘の状態を調査する為に、墳丘北部と東南部とにトレンチをおろした結果、墳丘裾部より約一米六〇の中をもった葦石が発見された。(図第一〇)この葦石は墳丘中半より上においては見出されず、墳丘裾部にのみ前述の中をもつてめぐらされていたものと思われる。この葦石の位置は最下端において、北部は頂上よりマイナス一米八八、東南部はマイナス二米八一であり、その差は一米三である。そして東南部の葦石は上端より一米三〇の所迄は約二〇度の傾斜であるが、それから先は約七〇度という急な傾斜を有している。これに反し、北部の葦石は一樣に約二〇度の傾斜をもって葦かかっている。この葦石の下には、古墳築造時の地表である黒色土が約二〇〜三〇厘あり、その下に褐色土が堆積しているが、この黒色土は北部においては頂上よりマイナス一米六、東南部でマイナス一米六六のところに見られ、その差は六〇厘である。この差を調整する為に東南部の葦石を、裾の方へいって、七〇度という急なこしらえにしたと思われる。この葦石を基準にして直径を計ってみると二〇米である。

これらのことからこの古墳が傾斜地に作られた山寄せのものである事がわかる。尚葦石の上部には約四〇〜五〇厘の黒色土が堆積しているが、これは古墳築造後に堆積したもので、現在の地表を成している土である。

尚墳輪は本古墳に於いては認められなかった。

古 代 編



B 内部構造

本古墳は横穴式両袖型石室で、やや直南に開口している。石室は既に盗掘されており、玄室は完全ではない。

玄室

玄室の天井石は三石の大石を使用していたようであるが、一石は何処かに持ち運ばれ、一石は玄室内に落ち込み、一石が完全に残っているのみである(図版第九)。最初、落ち込んでいた天井石を奥壁と推定し、調査をすすめたが、その結果天井石と判明したもので、今にも倒れそうになっている。

石室は截石切組積で、石の組み合わせる部分は第七図の如く一方の石を直角に切り、互いにピッタリと組み合わせるようになっている。非常に精巧であり、見た目にもきれいだである。側壁は約七度の傾斜をもち、奥壁は一石である。石材は安山岩である。

石室の寸法は図版第八の通り。

(図版第八)

玄室長	右	m 3.11
	中	3.09
	左	3.15
玄室幅	奥	(推定) 1.92
	中	1.96
	前	1.94
高	奥	1.30
	右	3.16
羨道長	左	3.30
	玄門	1.14
羨道幅	羨門	1.05
	石り面	0.86
幅高	細上床	1.06
	高	

玄室入口には立派な玄門がある。又床には粗石が置かれている。玄室の天井石は厚さ五十四種の石を屋根型に加工してある。この東の門柱は間口四三種、奥行(巾)四〇種、西が間口三七種、奥行四五種であり、粗石は高さ三〇種、幅四三種である。この左右門柱、粗石並びに粗石には、南側(すなわち羨道側)よりが約十二種の幅で、深さ三〇五種の切込みがあり、その切込みにより、ここに何か爪状の

ものを使用したと思われる痕跡が認められる。

羨道、墳塞

羨道部は完全に残っており、墳塞の状態も知る事が出来た。すなわち、羨道もやはり截石切組積であり、羨門を有する立派なものである。又羨門の左右には、截石と自然石を用いて石積みが成されており、特殊な構造を示している。

墳塞は羨門より北へ二米五〇の所迄施されており、その状態は間詰めで、羨道入口、そこから内へ一米位の所と、二米五〇の所と三ヶ所に長径五〇種、短径二〇種位の自然石を横に積み、その間に大小の石を投げ込んで墳塞としている。尚粗石と墳塞の間には約二五種の間隙がある。

玄室の床面には玉石が敷かれ、その下は石の削りかすが一五種ばかり堆積しており、古墳築造の際の石の加工はこの現場で行ったと推定される。その下には黒色土の混じたローム層が四八種、そして更にローム層が下に続いている。この地層は羨門の前においても同様である。石室築造の際には、葦石下に認められた黒色土を除いて、褐色土を出し、この上に築造していったものであろう。

尚粗石並びに羨門のまわりには長径二〇種、短径一五種位の石を寄せて補強をしている。

出土遺物

本古墳は前述の如く既に盗掘されており、遺物の出土は極く少数の須恵器破片、土師器破片、鉄片のみである。この出土したものも、奥壁前から出た須恵器と、羨道附近から出た須恵器とが一つ一つといった具合で、石室内は相当攪乱されており、埋葬当時の状態は到底把握事は出来なかった。

以上が本古墳の発掘結果であるが、これをまとめてみると、

- 1 円墳であり、山寄せである。
 - 2 埴輪は認められない。
 - 3 横穴式両袖型石室である。
 - 4 壁は截石切組積である。
 - 5 玄室の長さ幅の比は一・六である。
 - 6 玄門、羨門を有する。
 - 7 羨門の前に特殊な石積み有する。
 - 8 葦石が墳丘裾部をまわっている。
- 等の特徴を有するものである。(松本浩一)

